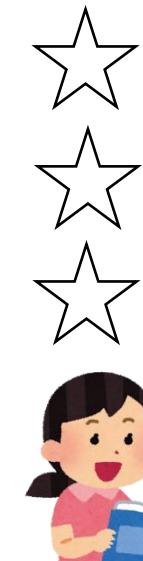


名前)

視点のちがいに着目し、心情や人物像をとらえて読み、感想を書こう

- 1 「律」の視点から書かれた「1」を、「律」の心情を確かめながら音読しましよう。



ステップ1 (とらえよう)

2 「周也」の視点から書かれた「2」を読みましよう。「1」と「2」を合わせることでわかったことはどんなんですか。「1」と「2」を関連付けて、線を引きましょう。

1

教課後のさわがしい玄関口で、いきなり、周也から「よつ」と声をかけられて、どきっとした。

「あれ。周也、野球の練習は？」

②「今日はなし。かんとく、悪用たって」

うわばきをぬぎながら周也が言って、くつしたにぱっかり空いた穴から、やんちゃやうな親指をのぞかせた。

その指をスニーカーにおさめて、周也はなかなか歩きだそとしない。どうやら、いっしょに帰る気のようだ。小四から同じクラスの周也。家も近いから、周也が野球チームに入るまでは、よくいっしょに登下校をしていた。なのに、今日のぼくには、周也と二人きりの帰り道が、はてしなく遠く感じられる。

もともとくつをはさかえて外へ出ると、五月の空はまだ明るく、グラウンドに舞う砂ぼこりを西日がこがね色に照らしていた。

「ああ、腹へった。今日の夕飯、何かなあ。あしたの給食、何かなあ。」

「な、律。昨日の野球、見たか。」「夏休みまで、あと何日だったっけ。」

周也の話があちこち飛ぶのよ、いつのこと。なのに、今日のぼくにはついていけない。まるでなんにもなかつたみたいに、周也はふたんと変わらない。ぼくだけがあることを引きずっているみたいで、一步前行く緑色の

パークーが、どんどんにくらしく見えてくる。

今日の夏休み、友達五人でしゃべっているうちに、「どうちが好き」とて話になつた。「海と山は」「夏と冬は」「ラーメンとカレーは」「曲アラシのかたいのとやわらかいのは」——みんなて順に質問を出し合つ、「海」「山」「海」と、ほんほん答えていく。そのテンポに、ぼくだけついていけなかつた。「どうちがかなあ」とか、「どうちがかなな」とか、一人でこによつていたら、周也が思にいらついた目でぼくをにらんだんだ。

「どうちが好きってのは、どうちが好きじやないのと、いつしょじやないの。」

先のとがつたするどいものが、みぞおちの辺りにずきどささつた。そんな気がした。そのまま今もささり続けて、歩いても、歩いても、ふり落とせない。

③「遅延をしないぼくに白けたのか、周也の口数も少しだに減つて、大通りの歩道橋をわたるころには、二人してすがりだまりこんでいた。階段をのぼる周也と、ぼくとの間に、きょりが開く。広がる。ここ一年でぐんと高くなつた頭の位置。たくましくなつた足どり。ぼくより半年早く生まれた周也は、これからもずっと、どんなこともチ

ンボよく乗りこえ、ぐんぐん前へ進んでいくんだろう。

「1」と「2」を合わせることでわかったこと
「1」と「2」を合わせて
書いてみよう。

① 実は、周也はわざとふだんどおりにして、必死で話しかけている。あせつて、重くひびいてしまつたのが分かつた。まずい、と思うも、もうおせい。以降、絶対にぼくの顔を見ようとした。律のことが男になつて、野球の練習を休んでまで玄関口で待ち伏せをしたのに、いざ並んで歩きだすと、気まずいなんかもくにたえられず、生々がいた。

② 「この前、給食でプリンが出てから、もうずいぶんたつよな。」「むし歯が自然に治ればなあ。」「山田んちの姉ちゃん、一輪車が得意なの、知つたか。」

何を言つても、背中こしに聞こえてくるのは、さえない足音だけ。ぼくがしゃべればしゃべるほど、その音は遠のいていくような気がする。

ふいに母親の小言が頭をかすめたのは、下校中の人がけがあちこちへ枝分かれして、蓮がすいてきたころだった。

えいの音だけ。ぼくがしゃべればしゃべるほど、その音は遠のいていくような気がする。

「周也。あなた、おしゃべりなくせずして、どうして歩き出すことよ。あなたは一人でほんほん球を放つて、いい球を投げられたなら、律だつて何か選んで、いい球を投げられたなら、律だつて何か選んでくれるんじやないか。」

「どうしよ。」

「ビンボン。なんだそりや、とそのときは思つたけど、今、こつして壁みたいにだまりこくつている律

を相手にしていると、その意味が分かるような気がしてくる。たしかに、ほくの言葉は軽すぎる。ほん

ほん、むだに打ちすぎる。もつとじっくりねらいを定めて、いい球を投げられたなら、律だつて何か選んでくれるんじやないか。

でも、いい球つて、どんなのだろう。考えたとたんに、舌が止まつた何も言えない、言葉が出ない、どうしよう。あわてるほどにほくの口は動かなくなつて

大切！物語などで、語り手がその作品をどこから見て語つていいかということを「視点」といいます。

はあ。声にならないため息が、ぼくの口からこぼれて、足元のかけにとけていく。どうして、ぼく、すぐ立ち止まっちゃうんだろう。思つてることが、なんで言えないんだろ?
 ④ ほくは海のこんなところが好きだ。山のこんなところも好きだ。その「こんな」をうまく言葉にできたなら、周也どちらんとかたを並べて、歩いていけるのかな。「どうちも好き」と「どうちも好きじやない」がいっしょなら、「言えなかつこと」と「なかつしたこと」もいっしょになつちやうのかな。考えるほどに、みぞおちの辺りが重くなる。
 市立公園内の遊歩道にさしかかったころには、ぼくは周也に三歩以上もおくれをとつていた。もうだめだ。
 ⑤ 信じがたいものを見たのは、そのときだった。
 空一面からシャワーの水が降ってきた。
 もちろん、そんなわけはない。なのに、なぜだかどうにブールの後に浴びるシャワーがうかんだのは、公園の新緑がふりまく初夏のにおいのせいかもしない。

「うおっ」
 「何これ」
 頭に、顔に、体中に打ちつける水滴を雨と認めるのは、少し時間がかかった。晴れているのに雨なんて、不自然すぎる。ぼくと周也はむやみにじたばたし、意味もなくとんだりはねたりして、またたく間に天気雨が通り過ぎていくと、たがいのぬれた頭を抱き合って笑つた。

本当に、あつというまのことだったんだ。ざざっと水が降ってきて、何かを洗い流した。周也の気どつた前がみがべたとなつたのがゆかいで、ぼくはさんざん腹をかかえ、気がつくと、みぞおちの異物が消えてきた。単純すぎる自分がはずかしくなつたのは、笑いの大波が引いてからだ。うつかりはしゃいだばつの悪さをかくすように、ぼくはすっと目をふせた。アスファルトの水たまりに西日の反射がきらきら光る。そのまましさに背中をおされるように、今だ、と思つた。今、言わなきや、きっと二度と言えない。

「ほんとに両方、好きなんだ」
 周也はしばしまばたきを止め、まじまじとぼくの顔を見つめ、それから、こっくりうなずいた。周也にしてはめずらしく言葉がない。なのに、分かつてもうえた気がした。

「行こつか」
 「うん」
 ぬれた地面にさつきよりも軽快な足音をきざんで、ぼくたちはまた歩きだした。

無言のまま歩道橋をわたった先には、しかも、市立公園が待ち受けている。道の両側から木々のこずえがたれこめた通り道。人声も、車の音も、工事の騒音も聞こえない緑のトンネル。ぼくはこの静けさが大の苦手だった。
 ④ 正確にいうと、だれかどいるときのちんちくが苦手だ。たまち、そわそわと落ち着きをなくす。何が言わなきやつてあせる。野球チームに入る前、律は園を通りかかるたびに、しんとした空氣をかきませるみたいに、ピンポン球を乱打せずにいらしかった。

⑤ 律のほうはちんちくなんてちつとも気にせず、いつだって、マイペースなものがたけど。
 そつと後ろをふり返ると、やっぱり、今日も律はおつとりと一歩一歩をきさんでいる。まぶしげに目を細め、木もれ日をふりあおぐしさに、よゆうしゅん、無数の白い球みたいにうつったんだ。

ぼくがむだに放ってきた球の逆襲。「うおっ」と思わずとび上がつたら、後ろからも「何これ」と律の声がして、ぼくたちは全身に雨を浴びながら、しばらくの間はたばたと暴れまくった。はね上がる水流しき、びしょぬれのくつ。たがいのあわてっぷり。何もかもがむしょようにおかしくて、雨が通りすぎるなり、笑いがあふれだした。律もいっしょに笑つてくれたのがうれしくて、ぼくはことさらに大声をはり上げた。
 ほんとに両方、好きなんだ。
 はつとしたのは、爆発的な笑いが去つた後、律が兎にひとみを険しくしてつぶやいたときだ。
 「ぼく、晴れが好きだけど、たまには、雨も好きだ」
 ほんとに両方、好きなんだ。
 たしかに、そうだ。晴れがいいけど、こんな雨なら大かんげい。どちらも好きってこともある。心で賛成しながらも、ぼくはどうさにそれを言葉にできなかつた。こんなときにはぎつて口が動かず、できたのは、だまつてうなづくだけ。なのに、なぜだか律は雨上がりみたいなえがあにもどつて、ぼくにうなづき返したんだ。

「行こつか」
 「うん」
 しめつた土のにおいがただようトンネルを、律と並んで再び歩きだしながら、ひょつとして——と、ぼくは思った。投げそこなつた。でも、ぼくは初めて、律の言葉をちゃんと受け止められたのかもしれない。

④ 実は、周也はだれかといふときのちんちくが苦手で、しんとした空氣をかきませるみたいに、ピンポン玉を乱打してしまつた。
 ⑤ 実は、律はよゆうではなく、周也に追いつけないあきらめの境地で天をあおいでいる。

「1」と「2」を合わせることでわかつたこと